

寄せられた多くの善意 ご支援ありがとうございます

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと
再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

三宅島マリンズコーレは、8月2、3日に第20回目を阿古で開催した。主催は商工会、噴火災害中から浅沼基会長（神着・利八屋店主）が地産地消など陣頭指揮をして支えてきたが今年で引退。今回から長谷川一也氏に引き継いだ。



噴火から14年たち、記憶の風化が心配される中、ふるさとネットの呼びかけに多くのご寄付が寄せられた。寄せられた善意は復興半ばの島民の支えになるもので、心より感謝申し上げます。

ご寄付のお願いに対して、たくさんの方から貴重な多くのご寄付と激励のお言葉をいただきました。誠にありがとうございました。三宅島の2000年噴



9回目出場の八丈島フラ・グループ、ありがとう！

火災害も14年の長きにおよび、少なくなつたといえ、いまだ火山ガス警報が連日出されています。しかし、これに負けることなく私たち三宅島島民は、全国の皆さまに支えられ再生・復興の努力を重ねています。今後とも、よろしくご支援のほどお願いいたします。

事務局便り

○三宅島支援者の集い
12月13日(土)、19:00～ビストロおきみくらにて支援者の集いを行います。参加される方は、事務局までご連絡ください。

○第37回世話人会
9月6日(土)18:30～巢鴨ルノアールにて世話人会を行います。宜しくお願ひ致します。

○青空フェスタ
10月5日(日)、神楽坂青空フェスタに三宅島物産展を出店予定です。

【三宅島ふるさとネット事務局】

郵便番号：173-0005
住所：板橋区仲宿 25-6
電話：03(3963)5678
FAX：03(3963)5697
担当：栗原

ます。

ご寄付とともに届いた声

・会長さんはじめ、皆様の揺るぎない信念に涙が溢れます。どうぞ益々のご活躍をお祈り申し上げます。(帰れぬ老夫婦より) 元郵便局長、三宅村老人クラブ連合会長 平松尚志

他に協力いただいた皆様

・いつもありがとうございます。中村聖子様 少ないですが役立ててください。香川澄子様 三宅村坪田で業務していましたが、伊豆大島に避難し(坪田に帰れないまま)、このたび健康を害して横浜に転居し、通院しています。司法書士星野秀人様 いつもお便りありがとうございます。DTP

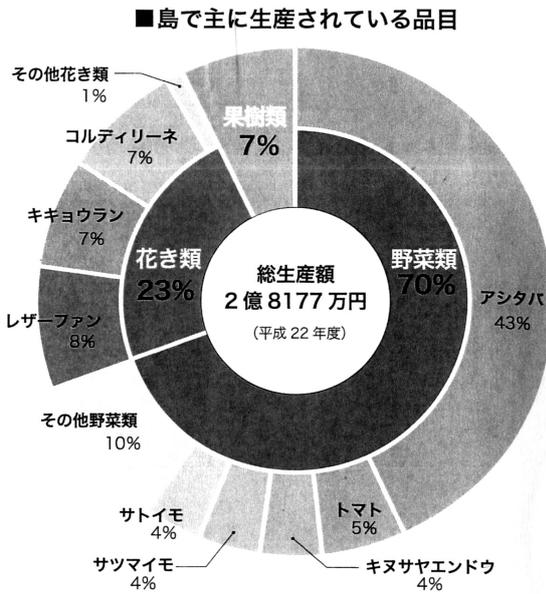
△も新会長に引き継がれ新たな紙面づくり期待您的しております。皆さまの善意がますますよう！福土敬子様 ・ご活躍お祈りしています。山下文字様

前田玄様、平田節子様、沼田恭子様、山崎美貴子様、中村俊江様、青谷知己様、佐藤就之様、(株)キタジマ様、遠藤芙美子様、倉持房枝様、古館秀也様、小曾スミ子様、竹澤美穂子様、吉野文雄様、今井家子様、四谷信子様、吉田信行様、司法過疎サポートネットワーク様、吉永和恵様、

※ご協力ありがとうございます。続きは紙面の都合で次号で紹介させていただきます。

観光産業に光が見える中で

望まれる 帰島10周年イベントの発信



昨年より来島者が増加

「おいでください 夏の三宅へ」前号で来島を呼びかけた。嬉しいことに8月12日読売新聞夕刊1面トップで山村英隆記者が、6月

は昨年比で観光客が1割近く増、光が見えてきたと報じた。帰島直後にも同紙の平しの記者がトップ扱いで、三宅を紹介し励ましてくれた。感謝！感謝です。この新報も都庁記者ク

未だ復興半ばの三宅島だが、観光客は昨年よりも1割多くなった。まだ噴火以前に戻っていない農業や水産業でも新たな取り組みが見られる中、村は、明るい兆しを逃さぬよう、帰島10周年を記念したイベントなどの内容を早く決め、発信をすることが重要だ。



農業の主力であるアシタバ



漁獲量が増えているキンメダイ

ネットのHPを更新



更新されたトップページ

平素より、ふるさとネットのホームページをご覧いただき誠にありがとうございます。

この度、使いやすく、わかりやすく情報をお届けできますように、ホームページを新しくしました。トップページのURLが変わっておりますのでブックマークされている方は、変更をお願いします。

今後とも、よろしくお祈りします。

<http://miyake-furusato.net>

三宅支庁「管内概要」より

三宅支庁の平成25年度「管内概要」から農業、水産業に関するデータを紹介する。

・農業

上に掲載した円グラフは、三宅村村勢要覧(平成25年3月)による。噴火災害以前は、「アシタバは、伊豆諸島最大(国内最大)の産地」。帰島後復旧で99ヘクタールの農地と農道等が復旧され農業戸数118戸、販売農家45(内主業6、準主業2、副業37)、自給的農家は73。農家人口は、総数83。

アシタバ、赤芽イモ、切り花等市場出荷中生産額は、約

・水産業

2億8千200万円。新たな特産品としてパッションフルーツの栽培に取り組んでいる。

水産業では、カツオ、マグロ、キンメダイなど魚類の水揚げが噴火災害前と同水準に戻りつつあるものの、テングサや貝類などの磯根資源については、依然として、回復に至っていない。

三宅島の平成24年の漁獲量は、187トンであるが避難前の平成11年の漁獲量513トンに対して漁獲量の平均は、約185トン、4割に満たない。24年の登録漁船は、160隻数(20年度比マイナス13)、499・81トン。若手育成がカギ。

チャリティーイベント賑やかに 鶴吉さんの構成・演出で

「がんばろうふるさと」完全復興 三宅島・東日本・伊豆大島」と銘打ったチャリティーイベントが、8月17日に新宿で開催された。構成・演出を手掛けた鶴吉さんの日本舞踊や、鶴吉さんと今井芳継さんのロックとの共演など、多くの出演者による演目が披露され、会場の観客を楽しませた。

「がんばろうふるさと」完全復興 三宅島・東日本・伊豆大島」は、8月17日の17時半から新宿区角筈区民ホールで行われた。このイベントは主催であり舞踊家の鶴吉さんが「せめて歌や踊りで頑張るための力になりたい」と



鶴吉さんの円熟の舞踊

という思いで開いたもので、会場入口では三宅島や東北の特産品の即売会も行われた。イベントの1部では平野華尚さんによる書道パフォーマンスや鶴吉さんの日舞、NPO法人水守の郷七ヶ宿・副理事長のZancy 榎戸さんと佐藤会長の復興に関するトークイベントもあった。2部ではスペンシャルセッションとして鶴吉さんの日舞と今井芳継さんのロックの融合などを披



多彩なる出演者による楽しいステージ

露。2部の終盤にはパフォーマンスが舞台から降り募金箱を持って廻るという取り組みもあり、後日ネットにもご寄付。その後会場にいる全員で「ふるさと」を合唱し、イベントは幕を閉じる予定だったが、アンコールの声が鳴り止まなかったため、鶴吉さんが「おてもやん」を披露。再び会場を沸き立たせた。終了後に佐藤就之夫さんとネット会長は、「被災地を忘れずに支援し続けてくださっていることに本当に感謝しています。災害の風化が進んでいます。今後も頑張っていきます」と語った。

被災地元気づけるための活動

「これからもできる限り」

「このイベントでは、古典的なものばかりではなく、演歌に合わせて踊ったり洋舞を取り入れたりするところでお客様が楽しめるような工夫をしたという。最後に披露した「おてもやん」もラテン調の



イベント終了後取材にに応じてくださった鶴吉さん

今回のイベントに関して鶴吉さんは、「会場に来てくださった皆さんの喜びの顔が見られてよかったです。また、義援金も多く集めることができました」と聞き、少しは役に立てたのかなと思います」と話した。このイベントでは、古典的なものばかりではなく、演歌に合わせて踊ったり洋舞を取り入れたりするところでお客様が楽しめるような工夫をしたという。最後に披露した「おてもやん」もラテン調のアレンジだった。鶴吉さんは、災害によって辛い思いをしてきた多くの人たちのことを訪ね、踊ることによって元気づけたいと思ったのがきっかけでこの活動を始め、10年以上続けている。「このように長い間、佐藤会長をはじめたくさんの方に協力をしてもらったお陰です」と活動をやるうえで出会いが重要であったことを話す鶴吉さん。最後は、「これからも踊り続けられる限りこのような活動を継続していきたい」と思っています」と笑顔で締めくくった。

オーシャンファミリー海洋教室 多くの子どもたちが参加

モイヤー博士の遺志を引き継いで



長太郎池で行われたサマースクール



富賀浜でも実施

サマースクール96年から

三宅島に約半世紀暮らし、魚類学者として世界的に有名だった「ジャックさん」ことジャック・T・モイヤー博士は、「海

は楽しく面白い、海はすばらしい、そして、海は大切」というメッセージを日本の子どもたちに伝えるために、1996年から、全国の子どもたちを集めて三宅島でサマー

1996年にジャック・T・モイヤー博士が全国に先駆け、三宅島で子どもたちを対象とした海洋教室を始めた。噴火により場所を移して行われていたが、2008年に再開した。その教室を主催しているNPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センターの海野佳子さんに、活動の状況等を寄稿していただいた。

スクールを開催しました。これが日本の海洋環境教育の始まりでした。
噴火の年も100人が予定
2000年の噴火の年、100名以上の子どもたちが、三宅島で海洋生物の学びができることを心待ちにしています。このスクールでは、5泊6日(船中1泊)、小学5年から18歳までの異年齢の子どもたちが、スノーケリング、スキング、ダイビングの技術を習得し、魚類、底生生物、サンゴなどを観察する、また、御蔵島周辺に生息するミナミバンドウイルカ

の行動生態を学びます。子どもたちは、日に日に潜れるようになり、観察する目が養われ、図鑑で調べ、魚類研究者顔負けで魚類を特定していきます。

5日間で島の自然を満喫し、最後の日には涙を流しながら「また、来るね!」と言って帰っていききました。その言葉の通り、毎年通ってくる子どもたちが多く、彼らは三宅島の虜になっていくのです。中には、島に移り住んだ人、魚類研究者を指摘した人、指導の手伝い手となって来てくれる人など、島の自然に魅せられ、島を愛する人が多くなります。

避難中は沖縄等で

避難中は、このスクールを沖縄、佐渡島、他の伊豆七島で行ってきましたが、火山ガスの影響が少なくなつた2008年から、三宅島で防災教育も取り入れて再開しました。残念ながら、このスクールの創設者モイヤー博士は避難中に亡くなり

ましたが:
三宅島は、自然が豊かな島です。これから多くのの人にこの島の魅力を紹介していく活動を継続していきたいと思っています。

【連絡先】
NPO 法人オーシャンファミリー
海洋自然体験センター
電話：046-876-2287
URL：http://oceanfamily.jp/
E-mail：info@oceanfamily.jp

編集後記

三宅島を訪れる観光客が昨年比で1割近く増え、島の観光産業が少しずつではあります。回復の兆しが見えつつあるのは嬉しいことです。

しかし、本紙の2面に掲載されているように、農業や水産業などは、まだ噴火前の状況に戻っていないので、こちらもよい方向に向かうことを祈っています。

(DTPA一同)